



「安穩」という言葉の厳しさ

西脇修 (にしわき おさむ)

はじめに

「安穩」というお言葉は、『浄土真宗聖典(注釈版)』には九カ所出てまいります。『仏説無量寿経』二カ所、『顕浄土真実教行証文類』六カ所、『親鸞聖人御消息』一カ所であります。『無量寿経』と『教行信証』には、仏国土や衆生の利益などの安穩が述べてあります。

このたびの親鸞聖人七百五十回大遠忌法要のローガンの「世のなか安穩なれ」は、『親鸞聖人御消息』二五(『注釈版聖典』七八四頁)の一節であります。

本稿では「親鸞聖人御消息」を引用しながら、宗祖の思いを時代背景を踏まえて私見を述べ、大遠忌をご縁としての私たちの歩むべき方向性を考えます。

宗祖の御消息を拝読する

この御消息は、鎌倉での念仏訴訟が落ち着いたことを報じた性信房の書状に対する返書(建長年中・一二四九～一二五六年・宗祖七七～八四歳)ですが、この書状の中に、「このやうは、故聖人(法然)の御時、この身どものやうやうに申され候ひしことなり。こともあたらしき訴へにても候はず」とあり、お念仏申すことに対しての訴訟は法然聖人の時代からあったことで、私も蒙っていることで新しいことではありませんと述べられ、併せて、「念仏をとどめられ」(承元元年の専修念仏停止・一二〇七年・宗祖三五歳)、「曲事」(承久の乱・一二二一年・宗祖四九歳)という文言があります。特に承元の念仏停止は、天皇・上皇の諱(実名のこと)を記していられしこと(『注釈版聖典』、『教行信証』化巻四七一頁)、承久の乱での後鳥羽上皇等の遠流を示唆する中に宗祖の憤怒の極みをうかがいます。

「わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため、国民のために、念仏を申しあはせたまひ候はば、めでたう候ふべし」。「料」は「ため」の意。「朝家の御ため」の左訓は「おほやけのおんためとまうすなり」ですから、国家・国土でしょう。「国民のために」の左訓は「くにのたまひやくしやう」ですが、中世社会の歴史用語としての百姓は農民ではなくすべての職能民の表現ですから、人々でしょう。すなわち、自分のためではなく国家・国土や人々を憂い、お念仏申すことはすばらしいことだと宗祖は述べておられるのです。

さらに、「まづわが身の往生をおぼしめして、御念仏候ふべし」とは、「本願力回向の信心」のお念仏ですから、わが身の浄土往生があつてこそ大慈悲心を行ずる身になるということではないで

しょうか。ですから、「わが身の往生一定とおぼしめさんひと」は、「御念仏ころにいれて申して」「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべし」となるのでしょうか。

宗祖の御消息をいただく

このように宗祖のこの御消息には、専修念仏停止への怒りと国家や人々への鋭い慧眼、さらには、念仏者の実践が述べられていると思います。

当時の社会にあつて念仏者の集団は「わが身の往生が一定である」という基盤の上に成立していました。それは一切衆生を平等に救うという仏教の基本原則、すなわち本願他力の救いの結果の集団にほかなりません。故に自他平等心のもとに、具現化としての社会的実践が生じます。当然そこには反平等の社会との軋轢、訴訟などがあり、逆に迎合も生じました。当時の念仏者の集団は反平等社会の呪術性との訣別、人格の平等性の確立、聞法者即伝道者であったと思えます。

お念仏を申しておれば世の中が安穩になるのではなく、お念仏申すことは社会的事実の上に立って大悲を行ずることであり、それをもって世の中が安穩になるのではないのでしょうか。

念仏者の姿は仏の前にあつて平等の姿なのではなく、人格が平等であるべきことを仏より願われている姿なのです。ですから念仏者には人格の平等のもとに真実の自由があるのです。また、そうでなければなりません。

宗祖の時代はお念仏を申すことは命がけでした。それはお念仏によって往生浄土を約束された多くの人々が大悲を行じ、人格の平等を希求したからでしょう。この願いは平等を否定する構造の上に存在した為政者や宗教者には恐れ以外の何者でもなかったのです。ですから、念仏停止の政策がとられたのです。逆説的には、お念仏の真実の証明であります。

まとめにかえて

現代の全人類の三課題は「平和・環境・人権」です。それは、不平等社会・格差社会の言葉ですべてが表現されるでしょう。我が国ではそれらの現象の結果の一部として、自死者の三万人超が十年連続、非正規雇用は全労働者の三分の一を超えた事実があります。また、医療崩壊や無差別殺人への対応、高齢者の生命保障の施策等は万全ではありません。いのちを軽視し、棄老国の体も様ってきています。

世界に目を転ずれば、戦争はとどまるところを知りません。エネルギーの浪費と枯渇は環境破壊といのちを脅かす状況を拡大化しています。人々や生きとし生きるすべてのいのちは、存在性を大切にするのではなく、利用性によって選別化されつつあります。

仏教本来の社会的実践は、個人を無苦安穩に導くことから始まり、その人の人格を完成させ、その周囲の社会を浄化させる。そして、最後にはその国土を平和で安穩にすることでありました。現実にこれらの実践はなされているのでしょうか。

宗祖は往生浄土を約束された念仏者が、如来さまの願いを具体的に社会に向かって発信し、実践することに、念仏者の真の姿を求められたと思います。宗祖の実践行は、仏教本来の社会的実践から念仏者としての社会的実践に昇華されたものなのです。

宗祖の時代の念仏者の集団は、「呪術との訣別・御同朋御同行・全員聞法全員伝道」でした。宗門の原点ではないのでしょうか。基幹運動の原点です。

「安穩」という言葉に、宗祖の生きられた時代とその厳しさを真摯に受けとめさせていただき、現代社会の多くの課題に対して下座行として大悲を行じ、実践していくことが来たる大遠忌法要をお迎えする

お心ではないかと思ひます。

(宗会議員)